

高知 & ラオス

土佐の国から 手を差し伸べたい

不思議なもので、高校時代のことは、なぜか鮮明に覚えている。あの日、あの時、あの場所……。もちろん、全てではないが、大人になってもそれは「昨日のこと」のようにも思える。それほど、10代の思い出は特別なものだ。

「ラオスは初めての海外、しかも開発途上国。第一印象は戦後の日本のように、ショックを受けたのを覚えています。でも子どもたちが元気いっぱい迎えてくれて、一気に不安が吹き飛びました」。そう話すのは、高知市立高知商業高等学校の卒業生、高橋謙司さん。1996年、高校生活最後の夏休みにラオスの地を踏んだ一人だ。

高知商業とラオスのつながりといえば、高知県内ではちょっと有名。その出会いは93年、生徒会メンバーのある一言から始まった。「貧しい国の人たちのために、何

か形に残る協力ができないかな」。そこで、地元NGOを通じてつながったのがラオス。「あれから20年、毎年8月のラオス訪問がライフワークになりました」と岡崎伸二先生（現教頭）は笑う。ラオスに学校を建てる。高知商業が行き着いた、途上国との関わり方だった。

そしてここには、学校で長く国際協力を続けるための工夫が。校内に「模擬株式会社」を設立し、生徒、教職員、保護者が一株500円で株を購入。その資金を使って毎年夏に現地で仕入れた民芸品などを、文化祭や地域のお祭りなどで販売し、その収益の一部をラオスの学校建設に充てるというものだ。もちろん、利益は「株主」にも分配される仕組み。国際協力でビジネス感覚を学ぶ。商業高校ならではのアイデアだ。

これまで建設に協力した学校は



昨年の「はりまやストリートフェスティバル」で、ラオスの市場で仕入れた商品をお客様に販売する生徒たち



高知県内の企業「GARRISON」と商品開発の打ち合わせ。間伐材とラオスの織物をどう組み合わせるかアイデアを練る



高知商業が建設を支援した保育園の前で。毎年の訪問をみんな楽しみにしてくれている。「最初のころに建てた学校は老朽化が進んでいます。地元の人たちどう維持管理していくかを考えたい」と成瀬先生

教室からたすきをつなぐ

開発途上国で困っている人たちの助けたい。高校生の一途な思いが学校を動かした。あれから20年、高知市立高知商業高等学校のラオスの学校建設支援は、新たな一歩を踏み出した。

子どもたちの運動会は毎年の恒例行事に。ラオスへの訪問は生徒会メンバーのパワーの源だ



保育園の落成式では「これで子どもたちも安心して学校に通える」と地元の人たちもうれしそうだった



6校。「昨年、もう一度原点に立ち返ろうと、現地の人たちが何に困っているのかを調査しました」。そう話すのは弘瀬博英先生。約15年にわたり、生徒会顧問として生徒たちを温かく支えてきた。そこで分かったのが、弟や妹の世話で学校に行けない子が多いこと。「学校に保育園をつくらう」。生徒たちが出した答えだった。

20年を振り返り 後輩につなぐ

そしてもう一つ、2013年の夏に向けて、あるプロジェクトが動いていた。20年の節目の年、みんなの思い出に残る訪問にしたい。誰もがそう考えていた。そこで立ち上がったのは卒業生たち。大切なことをたくさん教えてくれたラオスの人たちに感謝の気持ちを伝えたいと、有志が仕事の合間を縫って集合。みんなで楽しめる

イベントは何かを考えた。そこでたどり着いたのが「学校対抗歌合戦」。実は、ラオスの子どもたちは歌が大好き。これまで建設を支援した学校を集めた大イベントだ。

そして8月。今年の訪問のテーマは「たすき」。先輩から受け継いできた活動のたすきを後輩に託せる立派なものに。現在の生徒会メンバーが思いを込めた。参加者は卒業生も含む総勢約50人。初めてラオスの地を踏む生徒、20年通い続けた先生、10数年ぶりに再訪する卒業生……。その思いはさまざまだった。2年かけて企画したイベントは大盛り上がり。子どもたちはもちろん、現地の先生、保護者からも「毎年やってほしい」と大好評だった。保育園も無事に完成し、活動の次のステップが見えた訪問だった。

これで終わりではない。帰国してからが現役生の腕の見せどころ。毎年11月に、地元高知の商店街と共催している「はりまやストリートフェスティバル」に向けて、ラオスと日本のコラボレーション商品を地元企業と開発中。ラオスの織物と高知の間伐材を使った雑貨、ナンプラーなどの調味料と地元野菜を使ったお惣菜など、企業の人たちと頭を悩ませながら試作品を作っているところだ。「高知の人に、もっとラオスのことを知

ってもらいたいです」と生徒会長長の濱口飛鳥さん。現地で感じた衝撃、感動を共有したい。それが生徒たちの願いだ。

「先輩からラオスの人は温かい」と聞いていたんですが、正直イメージがわかなくて。でも現地の人たちの瞳を見た瞬間、ああ、これだ！ って」と話すのは栗栖杏梨咲さん。「校庭を走り回る子どもたちを見て、ゲームばかりしている日本人とは違うな。心の豊かさの意味が分かったような気がします」と谷脇優成くんは話してくれた。

「ラオスという国に触れることで、生徒たちは3年間で見事に変わっていきます。むしろ教員が学ぶことの方が多いですよ」と生徒会顧問の成瀬孝治先生。先生と生徒が共に悩み、考え、歩み続けた20年は、学校の、地域の財産となっている。

そしてこれからの挑戦は……。その質問を投げかけた時、先生、生徒たちからまったく同じ答えが返ってきた。「ラオスの子どもたちに高知を見てもらいたい」。本当の意味での交流が始まるようにしている。

高知の高校生が大切に紡いできたラオスとのつながり。先生に、地域の人に支えられながら、これからも高校生らしいフレッシュな取り組みを続けていく。



「学校対抗歌合戦」は想像以上の盛り上がり。各校代表の子どもたちが一生懸命歌う姿を、高知から訪問したメンバーは温かく見守っていた